

〔北山抄三
拾遺雜抄上〕讀奏事略○中

東海道宇女都美千、東山道山乃道、又北陸道久流加、山陰道曾止毛乃道、舊說山陽道加介止毛乃道、道、南海道南乃西海道西乃

〔玉勝間十〕畿内七道のよみ又郡司のよみ

此二書○西宮記を合せて考るに、西宮記の方に、東海道を、ウチベツミチとある、上のチは寫し誤にて海邊ツ道なるべし。へもじ濁るべし、ウベツアチは、うみべのみを省きたるにて、是も海邊つ道なるべし、アチは、即道なり、昔の片假字には、ミをも。アと書ること、書紀の訓などにも多く有て、まざらはしきなり、これ必差ありけむを、今は見分がたりぬ、ヒウガシは、ひんがしといふと同じ、こはもとひむかしにて、むは、たしかにむといひ、かも清たる言なるを、音便にて、むをうとも、んともいひ、それに引れて、かをも濁るなり、日向を、ひうがといふも同じ、東山道を、ウメツミチ、北海道を、ヤマノミチとあるは、後に寫すとて、所を誤れるなり、ウメツミチは、東海道の讀、ヤマノミチは、東山道の讀なり、北山抄正し、さてウメツは、かのウベと同じくべを通はしてメといへるなり、北陸道を、クルガノミチとある、クルガは、くぬがを唱へ誤れるなるべし、くぬがは、今世にも陸といふ是なり、山陰道を止モノミチとあるは、止の上は、曾字有しが脱落たり、そもそも西宮記おのが見たるかれこれの本どもは、みな上の件のごとくなるを、寫し誤とおぼしきところぐは、善本今も有べきなり、北山抄のかたは、すべて正しく見ゆ、其中に、北陸道に、キタノミチといふ讀なきは、落たるにや、南海道西海道の例によるに、これも北の道ともいふべきなり、又二書ともに、山陰道にカゲトモノミチ、山陽道にソトモノミチとある說は、ひがことなり、かげともは影面にて、南をいひ、そともは背面にて北なるを、さる意をもしらぬ人の、陰字によりて、ゆくりなくさかしらに入れかへたるなるべし、さて又東海道は、ヒウ